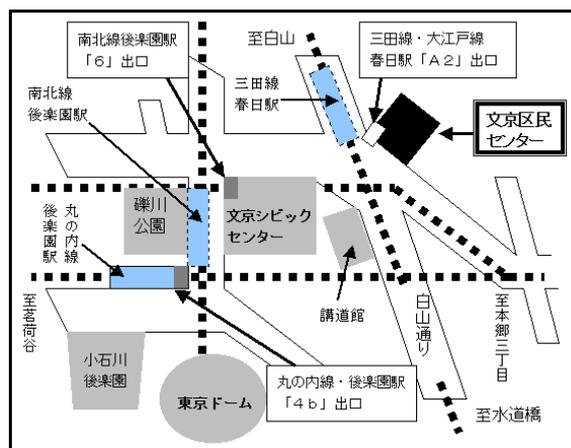


国分俊樹講演会

演題 福島の現状と子どもたちの人権
講師 国分俊樹 (福島県教職員組合 書記次長)
時間 2013年6月23日(日) 13時30分開場
場所 文京区民センター2A会議室 (東京都文京区本郷 4-15-14)
(シビックセンターではありません)

都営三田線・大江戸線「春日駅 A2 出口」徒歩 2 分、東京メトロ丸ノ内線「後樂園駅 4b 出口」徒歩 5 分、東京メトロ南北線「後樂園駅 6 番出口」徒歩 5 分、JR 水道橋駅東口徒歩 15 分

参加費 500 円
学生、福島の方 遠方の方は無料



毎日新聞「ふるさと」(裏面参照)を読み、この人の話を聞きたいと思いました。福島県で避難区域になっていない学校では運動会も事故の前と同じように行われていますが、国分さんは「セシウム 137 だけでも汚染が県の東半分広がっている。・・・健康に影響ないと言い切れるのか？」と疑問を感じ、「放射能の危険に慣れたくない」と語っています。

目の前の子どもの将来を心配しながら、ふるさとの安達太良山や阿武隈川を見て、涙がとまらなくなった国分さんの悲しみと苦しみに、首都圏に住む私たちはその苦悩の一端を担わなくてはならないのではないかと思います。

学校や教育はどういう働きをするものか、行政や組合や住民はどう思いどう動いたのか、原発事故の後に分かったことを国分さんに語ってもらおうと考えました。

事故の負担を福島の人々だけにかけるわけにはいきません。国全体の、いや世界中の人々や、動植物や生命体の危機でもあります。どうかみなさん、お忙しいですが、是非おいでいただき講演を聴き、子どもたちの未来について一緒に考えてください。

呼びかけ人 佐々木賢 0425-81-1976
阿部 忠 090-5444-3726

賛同者・グループ・団体

子どもたちの育ちと法制度を考える 21 世紀市民の会・「交流ハウス亀の島」(西山智彦・西山貴代美)・「ロシナンテ社」(四方哲)・「NPO 法人青少年自立支援センター」(工藤定次)・「横校労」(赤田圭亮)・「アングダンテ」(堀内由憲子)・「市政ウォッチの会」昭島市(佐々木秀子)・「じゃがいも親の会」(南雲和子)・「グループ鶴沼」(三井美珠)・「調布市西部公民館, 教育フォーラム・のどらか」(石黒紀子)・「武蔵野自由学校」(池見恒則)
名取弘文・大森直樹(東京学芸大学)・原田牧雄(日本社会臨床学会誌編集長)・岡山輝明・阿部治正(流山市議)・広瀬隆士・矢倉久泰・篠藤明德(別府大学)・松浦幸子(NPO 法人クッキングハウス)・石井淳一(ことぶき学童保育職員)

< 5 月 1 5 日現在 >

* 終了後、国分さんを囲んで懇親会があります。

「危険」に慣れたくない

「放射能の危険性を訴えることは、私を含め、福島で暮らし放射能に慣れつつある人間にとって、傷口に塩をすり込まれるようなことかもしれない」

東京電力福島第1原発事故から20カ月。福島県で避難区域になっていない地域の学校では除染が進み、制限されていた屋外活動や運動会も事故前同様に行われるようになってきた。

福島県教職員組合書記次長の国分俊樹さん(50)は苦悩の日々を送る。事故後、放射能への対応を



ふたご

原発事故20カ月

「放射能と人権」教育呼びかけ

紹介する組合ニュースを発行し続けてきた。行政と保護者らとの板挟みになっている現場の教師向けで、危険性を指摘する内容も少なくない。

そして今、放射線教育が気がかりと言う。県内では福島市が先頭を切る形で2学期から始まった。「学ぶことは大切」と国分さんも考える。し

かし、「『放射能を気に

することが問題』と心の問題にすりかえられてい

る面がある」と懸念する。

「セシウム137だけでも表面汚染密度が1平方

方メートルあたり4万粒以上の地域が福島県の東半分

に広がっている。これは放射線管理区域に相当する

レベルの数。そんな場所で暮らす異常さより、適

応できない不安を問題視するのはおかしくないで

すか」と話す。

「給食の食材の線量検査など、組合としても全力で取り組んできた。で

も、給食は年間180食。子供たちは除染された学

校に24時間いるわけじゃない。健康に影響がない

と言い切れるのか」と

東日本大震災が発生した昨年3月11日は、福島

市の組合事務所だった。その日は同県郡山市の自

宅には戻れず、帰宅は翌

日。原発爆発の報を聞いた時は「死を覚悟した」。

翌朝から異変が表れた。朝、安達太良山などい

つもと変わらぬ景色を眺めてみると、涙が止まら

なくなった。通勤途中に川や山を見ても涙した。

特に阿武隈川は幼い頃はカニとりで夢中にな

り、教員になっても趣味の自転車で堤防道路を疾

駆した川。妻と出会ったのも上流の白河市だっ

た。その川沿いに放射性物質は拡散した。「放射

能の運河になってしまった」と悲しげに語る。

爆発を受け、大学1年の息子と中3の娘を熊本の

妹宅に逃がした。事故の収束が見通せず、一家の

沖縄移住も検討した。だが、教員仲間の妻と出した

結論は「残る」だった。5月の連休明け、友人

と会いたいという子供らが福島に戻ってくると、

悲しみはさらに強くなった。吐き出せば改善するかと出勤前に大声で泣い

た。だが、よくなるない。6月に医師の診察を受

け、PTSD(心的外傷後ストレス障害)と言わ

れた。通院は今も続く。1年を過ぎたこの夏

「子どもたちのいのちと未来のために学ぼう 放射能の危険と人権」(明

石書店)という本を市民団体と出し、被ばく量低

減化、人権の回復、差別をしない許さない―そうした教育に取り組もう

と呼びかけた。

「報道も少なくなり、風化を感じる。自分でも

慣れてきたと思う。でも危険なもの危険。慣れ

ていってはいけないと思うんです」。ふるさとの

山河を奪われた、無念の思いを胸に、静かにそう

語った。【湯谷茂樹】(題字は書家・木島杏子さん)

「ふたご」は毎月1回掲載予定です。

毎日jpに動画

福島の教育について話す福島県教組書記次長の国分俊樹さん(宮間俊樹撮影)

